九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ジッドの『ギーターンジャリ』仏語訳 : 翻訳から出版までの経緯

吉井, 亮雄
九州大学大学院人文科学研究院教授

https://doi.org/10.15017/8817

出版情報 : Stella. 25, pp.115-127, 2006-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

ジッドの『ギーターンジャリ』仏語訳
――翻訳から出版までの経緯――

吉　井　亮　雄

インドの詩人・思想家でノーベル賞受賞者ラビンドラナート・タゴールの代表作『ギーターンジャリ』をフランスに紹介したのがアンドレ・ジッドであったことは一般にもよく知られている。じっさい彼の手になる仏語訳（主標題『歌の捧げもの *L'Offrande lyrique*』）は 1913 年の初版以来，一世紀にわたり定訳として広く流布し，現在はガリマール出版の中核的な叢書のひとつ「ポエジー」に収まる。小論ではこの仏語訳の成立経緯を具体的に確認したい。ただし以下の論述は先行研究，特にマイケル・ティルビーの論文「ジッドとタゴール」[1] に負うところが大きく，実質的に小論独自の寄与と呼びうるのは未公刊の関連資料数点の提示にとどまる。そのことをあらかじめ承知されたい。

メディアの急速な発達にともない，共時的・越境的な「世界文学」がますます身近なものとなった今日では当然至極のことと見なされがちだが，初期「新フランス評論」の活動のなかでも大方の耳目をあつめた新機軸が，外国文学の積極的な受容・紹介であったことはあらためて喚起されてよい。ドレフュス事件以後の過渡期をおおった政治＝文学的論議の風潮や，シャルル・モーラスら「アクシオン・フランセーズ」一派の唱道した愛国的孤立主義などを思い浮かべれば，ジッドをはじめとする編集陣の文学的普遍性への志向，外国文学にたいする優遇が，それなりの限界を内包しながらも，初めての現代戦の予感に脅え，またこれを現実として体験した世代の新たな世界観に応えうる文学理解のあり方だったことを忘れてはなるまい。そして芸術的な価値をなによりも優先するその非党派性こそが，両次大戦間をつうじ「新フランス評論」が国内はもとより，汎欧的にも並ぶものなき影響力をもちえた最大の要因だといってもけっして過言ではないのである。

周知のように初期「新フランス評論」は，ドイツ文学とならんでイギリス文

学にとりわけ熱い関心を寄せた。具体的な作家名としては，フィールディングやデフォー，ディケンズ，メレディス，キプリング，ハーディー，スティーヴンソン，コンラッド，チェスタートンなど。この海の向こうに豊かに広がる文学鉱脈を探る先導役となったのが，語学に堪能な若きコスモポリット，ヴァレリー・ラルボーである。先行誌「メルキュール・ド・フランス」におけるイギリス文学の専門家アンリ＝D・ダヴレー（この名をしばし記憶にとどめられたい）に対抗しうる人材として，「新フランス評論」誌の 1913 年元日号からイギリス文学関係の「ノート」を任されるが，それと同時期，アレクシ・サンレジェ・レジェ（のちのサン＝ジョン・ペルス）とともにジッドとタゴールの間に立って『ギーターンジャリ』仏語訳の産婆役をつとめることになる。

翻訳の計画にはジッド自身の創作活動も少なからず関わっている。いうまでもなく当時の彼にとって最重要の課題は，一刻も早く『法王庁の抜け穴』を完成・上梓することであった。作品の着想は遠く 1893 年頃にまで遡るが，物語の大筋がようやく固まりはじめたのは 1905 年のこと，『狭き門』執筆の大幅な遅れもあって，以後も仕事は思うようには捗っていなかったのである。停滞を打破し，この新たな「冒険小説」に必須のピカレスクな広がり，「レシ」作品群とは異なる自由奔放な文体を探るべく，ジッドが範を求めたのがデフォーやフィールディング，スウィフトらで，1910 年の本格的な英語学習の開始につづき，『ロビンソン・クルーソー』を，ついで『トム・ジョーンズ』『ガリヴァー旅行記』を「生肉を嚙るように」貪り読んでいる。後年の回想によれば，その後も「数年間はほとんど英語しか読まなかった」[2] ほどであった。原語による読書体験と軌を一にして，イギリスの作家・文学者たちとの個人的交流も急速に活発化する。まず 1911 年 7 月，ジッドはロンドンに赴き，当地で合流したラルボーとともにコンラッド宅を訪問，『ロード・ジム』の作者との信頼にもとづく交友の端緒をつくる。また『象徴主義の文学運動』で知られるアーサー・シモンズとも面会し親交を深めている。さらに翌年 12 月には再度渡英，批評家エドマンド・ゴス宅での会食のさい，ヘンリー・ジェイムズやアイルランドの小説家ジョージ・ムーアらを知るのである。このようなジッドをとりまく内外の状況からも見ても翻訳計画の発案・遂行の機は十分に熟していたのだといえよう。

ちなみに『ギーターンジャリ』原版は，タゴールが初めベンガル語で発表し

た韻文詩群を自らの手で英語に翻訳・編纂したもので，そのさい形式も散文に変更されている[3]。英訳にあたって詩人のイェイツやスタージ・ムーアの修正意見を容れたとはいえ，たしかに「純英国製」とは呼びにくい。だがそのことは，もっぱら芸術的な観点から優れた作品を求めていたジッドたちにとってなんら障害となるものではなかった。じじつ，英語原版をジッドに貸し与え，仏語版誕生の契機をつくったレジェは，これに先立つ 1912 年 10 月，ロンドンでタゴールと面会し，フランスでも読者を得たいという彼の希望を確認したうえで，ジッドにたいし英詩としての『ギーターンジャリ』を次のように賞揚している（同月 23 日付書簡）――

> 「新フランス評論」としては，アーノルド・ベネットを供するのではなく，ラビンドラナート・タゴールの作品をヨーロッパで初紹介なさるとよいでしょう。英語訳はタゴール自身によるもので，２週間後には出来しますが，ここ長らく英語で書かれたもののうちで唯一の詩作品（少なくとも，コヴェントリー・パットモアも，またすっかりその「亜種亜流」になりはてたとして，フランシス・トムソンさえも認めぬ人々にとっては唯一の詩作品）です。[4]

書簡にあるとおり『ギーターンジャリ』はほどなくロンドンのインディア・ソサエティから刊出，一年後のノーベル賞受賞への重要な布石となる。この英語原版がジャック・リヴィエール（当時「新フランス評論」誌編集次長（スクレテール））を介しレジェからジッドの元に届くのは，諸々の事情が重なり翌 1913 年 3 月まで遅れたが[5]，実際に一巻を手にし，その新鮮な詩情に魅せられたジッドは仏語訳の決意を固め，間をおかずレジェに著者との交渉を委ねる。これに応えて，同月末のものと推測されるジッド宛書簡でレジェは，「ロンドンで別れたときにはタゴールはまだどの出版社にも版権を譲渡してはいなかった」旨を報告し，「彼に話すべきは雑誌掲載での翻訳なのか，あるいは単行書としての翻訳なのか」を急ぎ知らせるよう促している[6]。

しかしながら訳者はすんなりとジッドに決まったわけではない。フランスでの受容を強く望んでいたとはいえ，タゴール自身はフランス語を解さず，『地の糧』の著者についてもまったく予備知識がなかったからである。折悪しく同時期タゴールがアメリカに旅行中で正確な所在が分からぬこともあって，計画が好意的に受け止められたのか否か不明なまま徒に月日が経過してしまう。そこ

で 6 月下旬，ジッドの意を受けてロンドン滞在中のラルボーが，詩人の代理人役をつとめていた音楽批評家アーサー・フォックス・ストラングウェイズに直接事情を尋ねることとなった。初回の面談で判明したのは，『ギーターンジャリ』の翻訳にかんしては他にもすでに 3 名の希望者が名乗りを上げているという事実。したがってフォックス・ストラングウェイズとしてはコンクールのかたちで訳者を決定したい，ついてはジッドにも詩集冒頭 12 篇の見本訳を要求する，といった話さえ出てくる。なんとも素っ気ないこの対応は，原著者同様，代理人もまたジッドの名を知らず，もっぱらラルボーが勝手に自分の友人を推薦しているものと思い込んだためらしい。しかしラルボーがジッドの書簡を携え再度の面談に臨むと，さすがにその効果は大きく，フォックス・ストラングウェイズは「ジッドにたいする無知を晒してしまったことに少々恥じ入った」[7] 様子を見せ，事は打って変わって好ましい方向へと向かう。この「とても感じがよく謙虚な人物」は見本訳を求める考えを捨て，タゴール当人やその友人たちと計らったうえで，彼らとともにジッドに有利な決定を下すことになるのである。その間（かん）レジェがタゴールに長い書簡を送り説得したことも情勢好転の大きな要因であったと思われる[8]。

かくして翻訳・出版のための環境は万事整ったかに見えた。じじつジッドは 7 月半ばから 8 月後半まで，「イタリア旅行の全期間にわたり唯一の仕事」[9] として『ギーターンジャリ』の翻訳に打ち込んでいる。だが，ここで予期せぬ事態が出来する。「メルキュール・ド・フランス」誌 8 月 16 日号にアンリ＝D・ダヴレーの名でタゴールにかんする長い論文が載るが，そこにはウェルトハイマー姓の未婚女性による仏語訳（後出の未刊書簡で判明するように実際はダヴレー自身が深く関与した訳）で『ギーターンジャリ』全詩篇の半数以上，計 54 篇が全文引用されていたのである[10]。あまりの驚きにジッドは計画を一時断念せざるをえず，タゴールの英語著作の版元マクミラン社に宛て窮状を訴えた。彼の要請を容れて同社がメルキュール・ド・フランスの社主アルフレッド・ヴァレットに抗議を申し入れる。それにたいし，さっそく釈明の書簡を返したのは論文執筆者ダヴレー本人であった。このマクミラン社宛書簡（9 月 8 日付）でダヴレーは，仮に自分がタゴールの詩作品への熱情ゆえに過度な量を引用してしまったのであれば謝罪すると述べながらも，論文を本のかたちで出版するつもりはなく，また「論文が出版界や読者層に及ぼした反響は，英語原版に

とって好ましいものであったばかりか，仏語版がより好意的に受け容れられるための呼び水ともなる」と主張する。いずれにせよ彼としてはジッドにたいし不正な業をなしたつもりなどまったくないのである――「『ギーターンジャリ』を仏訳している私の友人アンドレ・ジッド氏は私に何の抗議も寄こしておられません」[11]。だが，ダヴレーが示す見解の正否はともかく，翻訳権そのものをめぐってはマクミラン（および新フランス評論）とメルキュールのあいだで直ちに調整が図られたようで，さほど大きな問題には発展しなかった。また一旦はひどく意気阻喪したもののジッドは，自分の側に非はないと思い直し，おそらくは画家ウィリアム・ローセンスタイン（数年後ジッドの肖像画を描く）を含むであろう「タゴールの友人たちからの懇請を受けて」[12]ほどなく翻訳を再開，9月末にはこれをひととおり完了するのである。

つづいてジッドは11月3日から女性秘書をつかい自筆原稿をもとにしたタイプ稿作成の作業に入るが[13]，その3日後，ジャック・リヴィエールに宛てた書簡の末尾に「ダヴレー〔の論文〕は未読」[14]と短く書き添えている。独占翻訳権への配慮の欠如にたいし強い不快感を覚えていたとはいえ，雑誌掲載からすでに3カ月をへ，自身の仕事が終盤にさしかかってもなお同論文には目を通していなかった（少なくとも精読はしていなかった）のである。理由は容易に推測しうる。たしかに感情的なわだかまりも幾分かは与ったではあろうが，あくまで事柄の大本は意図的な選択によるものであった。すなわちジッドは，自らが翻訳しているあいだは既存訳からの影響を排除すべく，あえてこれを参照しないという方針を立てていたのではないか。じっさい同月18日付のリヴィエール宛書簡からは，ようやく点検（通読を2回）したダヴレー論文への辛辣な評価を透かして，出来間近のジッド版『ギーターンジャリ』にたいする小さからぬ自負が読みとれる――「断固として私は，タゴールの校正刷で〈ダヴレーの研究〉に冠せられた〈見事な〉という語を削除する。嫌悪感を覚えながら読み返したところだが，この通俗的な論文を前にすると寛大な気持ちは消え失せてしまうのです」[15]。ちなみに引用文中「タゴールの校正刷」とは「新フランス評論」誌12月1日号に掲載予定のタゴール詩篇抜粋の校正刷のこと。冒頭には10行ほどの前書き（元原稿はリヴィエールの執筆か）が付されていたが，実際の刊出テクストではジッドの言うとおり，「見事な」という形容辞は消え，単に「アンリ・ダヴレー氏の研究」となる。またダヴレーによる『ギーターン

ジャリ』からの抜粋が「暫定訳」と呼ばれるのにたいし，新フランス評論出版から近刊の『歌の捧げもの』単行版は「アンドレ・ジッド氏による独占翻訳権取得の全訳」とされ，後者の「正当性」が強調されている[16]。

『ギーターンジャリ』をめぐるジッド＝ダヴレー間の直接的なやりとりについては従来まったく情報がなかったが，最近になってようやく関連書簡数通の存在が確認された。記述内容から見るかぎり，まず間違いなく当該の話題にかんし両者がはじめて交わしあった書簡である。以下しばらくはこの未刊資料に依って事の経緯を追おう。まずは，本年5月にパリのサザビーズで競売に付されたダヴレー宛ジッド書簡25通（ただし結局は落札されず）のうちの一通から[17]。12月2日付のこの書簡でジッドは，とりわけダヴレーが他者の独占翻訳権を侵害したことをきびしく非難し，これぞまさしく「密売行為」なりと責める。またダヴレー訳自体にたいする疑義・追及も鋭く，具体例をあげて詩的な表現の歪曲を質している。たとえば第61詩篇について――「まさに月光による雲の受胎という着想が宿る «there» という一語をなぜ訳し落とされたのか。この着想こそは詩節の基に必須のものであり，削除されれば，残るはただ冗漫でだらけた詩情のみとなってしまうのに」。記述の理解を助けるためにも問題の第2詩節を英語原文と2つの仏語訳で示そう（強調は引用者）――

【タゴール原文】 The smile that flickers on baby's lips when he sleeps – does anybody know where it was born ? Yes, there is a rumour that a young pale beam of a crescent moon touched the edge of a vanishing autumn cloud, and **there** the smile was first born in the dream of a dew–washed morning – the smile that flickers on baby's lips when he sleeps.

【ダヴレー訳】 Le sourire qui voltige sur les lèvres de l'enfant qui sommeille, sait–on où il est né ? Oui. On raconte qu'un rayon pâle du croissant de la lune nouvelle a effleuré le bord d'une nue fuyante de l'automne et que dans le rêve d'un matin frais de rosée naquit le sourire qui tremble sur les lèvres de l'enfant quand il dort.

【ジッド訳】 Le sourire qui scintille sur les lèvres du petit enfant lorsqu'il dort – qui saura dire où il est né ? – Moi. L'on m'a raconté qu'un jeune pâle rayon de la lune nouvelle toucha le bord d'un défaillant nuage d'automne et que, **là**, dans le rêve d'un matin humide de rosée, un sourire naquit – le

sourire qui scintille sur les lèvres du petit enfant lorsqu'il dort.[18)]

たしかにダヴレー訳からは「消えゆく秋の雲の縁（ふち）」と「露に濡れた朝の夢」とがイメージの重なりとなって現れてこない。訳文全体の格調もあきらかにジッド訳がまさる（2行目の «Moi. L'on m'a raconté…» は，なかなかに思い切りのよい訳ではあるが）。

このジッド書簡にたいするダヴレーの返信（翌3日付の自筆下書き）も上記競売の同じロットのなかに含まれている。その内容を部分的引用をまじえたパラフレーズで紹介しよう。まずダヴレーはジッドの非難に「当惑」している旨を皮肉まじりに伝える――「貴方もまた私の無知を暴いてくださる！ 誰もがはっきりと，私は英語ができないと知ることでしょう！」。ジッドが指摘した誤訳の訂正にたいし礼は述べるものの，「自分の仕事を満足に手直しする時間がないので」その訂正を活かすことはできまい。また独占翻訳権がジッドに与えられていたことは知らなかったが，「このたびのノーベル賞受賞〔11月13日〕のような場合，タゴールについてフランスで書かれた唯一の論文を新聞各紙が勝手に利用するのを妨げることは私の力の及ぶところではなかった」。したがって「密売行為」をしたつもりもなく，「この件について手紙を寄こしたり電話をかけてくる人たちには，こう答えていたのです，『それはジッド氏です，ジッド氏にお会いなさい，ジッド氏に問い合わせてください』」……。

ダヴレーの釈明にジッドはとうてい納得できない。正すべきは正すという姿勢をつらぬき，日をおかず返書を送るのである。12月5日付のこの未刊書簡は筆者が昨年パリのある個人コレクションを調査・閲覧したさいに見出したものだが，おそらく意図したことであろう，タイプ打ちのためもあって（結びの一語と署名のみが自筆），オリジナルの文面はなおのこと事務的で冷ややかな印象を与える。封筒は残っていないが，すでに印刷を完了していた『歌の捧げもの』初版の序文（二つ折り1葉）が添付されている。以下が書簡の全文（仏語原文は本稿末尾に掲載）――

〔パリ〕1913年12月5日

親愛なるダヴレー

お手元にお届けするのは拙訳の冒頭に掲げる書簡形式の序文です。この序文が悪意を示すためのものではなく，ただ事の次第を改めてはっきりさせようとしたものであ

るのはお分かりいただけるでしょう。おそらくすでにご覧になった「新フランス評論」誌のタゴール詩篇抄冒頭の注記は，これよりもさらに穏やかな内容です。

とはいえ，私には貴方の仰ることがまるで理解できません。私は，翻訳はウェルトハイマー嬢によるもの，おそらく貴方にもまして英語が堪能だが，またおそらくはフランス語よりも英語のほうが得意な同嬢によるものと思っていました。〔こういう言い方をしたからといって〕私は貴方が英語を知らないと責めているわけではない。この翻訳がやっつけ仕事なのを非難しているのであって，事柄は同じではありません。たとえば「アナール」誌が引用した部分，きわめて不完全な訳文に正当性を与えてしまうような引用に，貴方がいくらかでも修正を施すことができなかったのを遺憾に思います。どうにも仕方がないのだ，貴方はそう仰る。だがそれでもなお貴方にはいくぶんかの責任があることをお認めいただきたい。そして，その点について私が貴方にわずかばかり苦言を申しあげたからといって，抗弁などなさらないでいただきたいのです。

敬 具

アンドレ・ジッド

前段冒頭の「書簡形式の序文」とは，すでに言及したレジェへの謝辞のことを指す。このなかでジッドは，彼のおかげで『ギーターンジャリ』の独占翻訳権を獲得できたと喜びを記すが，それゆえになおさら「詩集の過半を訳出した性急な版が某誌に載った」ことをとらえて，「焦るがあまりに花を散らせた」[19]と慨嘆するのである（訳者・掲載誌こそ名指さぬものの，記述は直截にして曖昧を排す）。また後段「アナール」誌に言及した箇所についても説明が必要だろう。たしかに同誌 11 月 23 日号や「イリュストラシオン」紙 11 月 22 日号は，タゴールのノーベル賞受賞を報じた記事とともにダヴレー訳を引用しているが，実のところ，記事を書いたのはダヴレー自身であった。そのことを知るだけにジッドは，「各紙誌が勝手に利用しただけで自分としては如何ともしがたかった」という訳者の釈明を全面的には容れず，テクストの修正は十分に可能であったのにみすみす好機を逸したと，皮肉をこめてその怠慢を難じているのである。

さて，以上のようなダヴレーとのやりとりと並行して，ジッドは『歌の捧げもの』初版の刊出を間近にひかえた 12 月 4 日，「新フランス評論」の姉妹組織ともいえるヴィユー・コロンビエ座でタゴール紹介のための講演をおこなっている。聴衆のなかにはリルケやジャン・コクトーの姿も認められ，盛会であったらしい[20]。細かな経緯は不詳であるが，ここまでの流れから見るかぎり，

ジッドが催しの準備にさほど多くの日数を費やしたとは考えにくい[21]。また講演原稿の出来栄えには満足していなかったようで，第2版（後述の普及版）の解題として活字化するにもかかわらず，同版刊出に先立ち早くもこれを「まったく無意味な序文」[22]と呼んでいる。とはいうものの，この講演がジッド訳の評判を高めるのに大きく寄与したことは疑えない。計500部印刷された青色表紙16折小型の豪華紙初版は，「版元から書店への献本は一冊もなく，また〔ジッド〕自身も個人的にせいぜい25部ほどを配っただけなのに，わずか一週間で完売した」[23]のである。

「新フランス評論」誌1913年12月1日号の裏表紙に予告されているように，当初の予定ではこの豪華紙初版と並び，やや大ぶりな活字をもちいた12折普及版が「白色叢書（ブランシュ）」の一冊としてやはり年内に出来するはずであった。だがこの計画は早い時点で変更され，結果的に普及版のほうは2カ月ほど遅れての刊出となる。変更理由の第一はおそらく，初版には誤植がいくつか未修正のまま残り，致し方なく正誤表を付すという不始末があって[24]，ジッドが新版の校正作業では万全を期そうとしたため。また「本の厚みを増す目的で」[25]，先の講演原稿を解題として追加したことも理由に挙げられよう。判明しているかぎりで以後の経緯を記すと，ジッドがベルギーのサント＝カトリーヌ印刷所から同版の再校2組を受けとったのが12月24日[26]，本文テクストの印刷が完了したのは翌1914年2月3日（ヴェルジェ紙使用50部限定の4折テリエール判も同日）だが，実際の刊出は同月下旬のことで，ただちにジッドはプレス関係への献本をおこなっている[27]。ちなみにこの「白色叢書」普及版は，第2次大戦後に一度組版を改めながらも，1961年3月の第136刷まで半世紀にわたり頻繁に増刷されることになる（さらにテクスト自体は63年以降も，別のタゴール詩集『果実あつめ』〔エレーヌ・デュ・パスキエ訳〕との合本で，「デュ・モン・ダンティエ」や「ソレイユ」「ポエジー」などガリマール出版の各叢書に収められる）。

『ギーターンジャリ』仏語訳の「翻訳から出版までの経緯」を対象とする小論の使命は，粗雑ながら以上の概観をもってすでにあらかた終わったものと考える。したがって，これ以降のジッドとタゴール作品との係わりについては次を指摘するにとどめよう――。ジッドは『ギーターンジャリ』の仏語訳だけで満足していたわけではない。ヴィユー・コロンビエ座での講演を準備するためマ

クミラン社をつうじ事前にタゴールの他の作品を取り寄せており，そのうち『サーダナ』については年が明けて1月には早くも仏語訳に着手，同時に他の数点の翻訳権も確保したい旨を表明していたのである。計画は結局2カ月後には放棄されてしまうものの，以後もジッドは英語新訳をそのつど校正刷見本の段階でロンドンから送らせるなど，タゴールに強い関心を払いつづけた。そのひとつの結実が戯曲『郵便局』の仏語訳『アマルと王の手紙』(1922年初版）であったことは断るまでもない。だが20年代以降ジッドがタゴールに言及する機会が大幅に減少していくのもまた否定できない事実である。これには，まずジッド自身の創作活動の変遷，さらに英語圏でタゴールの名声が相対的に低下していったこと[28]，一時的にではあれこの詩人がムッソリーニの誘いにのりファシズムのプロパガンダに加担する結果となったこと（いっぽうのジッドは次第にソヴィエト共産主義への傾斜を強めていく）など，いくつかの要因が考えられ，文学史的な観点からも興味ぶかい。筆者としてもいずれ稿を改め検討してみたい問題である。

註

1）Michael Tilby, «Gide et Tagore», in *André Gide et l'Angleterre*, actes du colloque de Londres 22–24 novembre 1995, édités par Patrick Pollard, Londres : «Le Colloque Gide», Birbeck College, 1996, pp. 67–77.

2）André Gide, «Voyage en littérature anglaise», *Verve*, printemps 1938 (mars–juin), vol. 1, n° 2, p. 14.

3）Rabindranath Tagore, *Gitanjali (Song offerings)*. A collection of prose translations made by the author from the original bengali, with an introduction by W. B. Yeats. Londres : Printed at the Chiswick Press for the India Society, 1912, xvi–64 pp.

4）Saint–John Perse, *Œuvres complètes*, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1972, p. 781.

5）Voir la lettre de Gide à Rivière du 19 mars 1913, in André Gide – Jacques Rivière, *Correspondance 1909–1925*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre de Gaulmyn et Alain Rivière avec la collaboration de Kevin O'Neill et Stuart Barr, Paris : Gallimard, 1998, p. 379.

6）Saint–John Perse, *Œuvres complètes*, op. cit., p. 782. プレイアッド版編纂者はこ

の書簡の日付を「1913年1月28日」と推定しているが，これは明らかな誤り。クロード・マルタンが指摘するように，同年3月末のものである可能性が高い（voir Rabindranath TAGORE traduit par André GIDE, *The Post Office / Amal et la lettre du Roi*. Édition bilingue établie et présentée par Claude MARTIN, Nantes : Centre d'Études Gidiennes, 2006, p. 108, note 2)。

7）1913年7月1日付レジェ宛ラルボー書簡。André GIDE – Valery LARBAUD, *Correspondance 1905–1938*. Édition établie, annotée et présentée par Françoise LIOURE, Paris : Gallimard, «Cahiers André Gide» 14, 1989, p. 149.

8）Voir TILBY, *art. cité*, p. 70.

9）André GIDE, *Journal, I (1887–1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Éric MARTY, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p. 749. Voir aussi la note suivante.

10）Voir Henry–D. DAVRAY, «Un mystique hindou. Rabindranath Tagore», *Mercure de France*, 16 août 1913, pp. 673–698. ジッドの『日記』プレイアッド新版は7月10日付の一段落につづいて以下の一節を活字化したが，この記述は上述のイタリア旅行（7月18日頃出立，8月21日帰着）に言及した挿入文からも明らかなように，8月中旬から下旬にかけてのものである――「私がラビンドラナート・タゴールを訳している（それがイタリア旅行の全期間にわたり唯一の仕事だった）と知ったダヴレーが，急いで『メルキュール』誌にW嬢〔ウェルトハイマー〕の翻訳をこれ以上はないほど多量に載せてしまった。もう仕事を続ける気がしない」(*Journal, I (1887–1925)*, op. cit., p. 749)。

11）Lettre de Davray à l'éditeur Macmillan du 8 septembre 1913, reproduite par Michael TILBY, *art. cité*, p. 70.

12）Lettre–dédicace «À Saintléger Léger», in Rabindranath TAGORE, *L'Offrande lyrique* (*Gitanjali*), trad. d'André GIDE, Paris : Nouvelle Revue Française, 1913.

13）André GIDE, *Journal, I (1887–1925)*, op. cit., p. 736 (17 novembre 1913).

14）GIDE – RIVIÈRE, *Correspondance 1909–1925*, op. cit., p. 407.

15）*Ibid*., p. 411.

16）Voir l'Avant–propos pour «L'Offrande Lyrique (Gitanjali)» de Rabindranath TAGORE, *La NRF*, 1er décembre 1913, p. 833. ちなみにジッドは，すでに2カ月ほど前，ジャン・シュランベルジェから受けた書簡（9月9日付）の欄外に次のような走り書きを残していた――「タゴールの名を一刻も早く世に知らしめたいと気が急いて，私たちの友人ダヴレーが『メルキュール』誌に相当数の詩篇の暫定訳を載せてしまった」(André GIDE – Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance 1901–1950*. Édition établie, présentée et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris : Gallimard, 1993, p. 535, note 3. 強調は引用者)。

17）Vente publique à Sotheby's (Paris), 30 mai 2006, lot 64 : «24 lettres

autographes signées et une lettre dactylographiée avec corrections autographes de Gide à Davray plus un brouillon autographe de réponse de Davray à Gide (Paris – Cuverville, 25 janvier 1909 – février 1919, 26 pages in–8 et 17 pages in–12)».

18) Tagore, *Gitanjali (Song offerings)*, op. cit., p. 35–36 ; Davray, *art. cité*, p. 690 ; *L'Offrande lyrique (Gitanjali)*, trad. de Gide, op. cit., pp. 83–84.

19) Lettre–dédicace «À Saintléger Léger», in *ibid*., p. 8.

20) Voir Rainer Maria Rilke, *Briefe an seinen Verleger 1906 bis 1926*, Leipzig : Insel–Verlag, 1934, p. 201 ; Jean Cocteau, *Lettres à André Gide, avec quelques réponses d'André Gide*, Paris : La Table Ronde, 1970, p. 38.

21) おそらく若干の誇張はあろうが，ジッドは1914年4月9日のフランソワ＝ポール・アリベール宛書簡で「即興で準備しなければならなかった講演」と記している（André Gide – François–Paul Alibert, *Correspondance 1907–1950*. Édition établie, présentée et annotée par Claude Martin, Lyon : PUL, 1982, p. 119)。

22) *Honneur à Saint–John Perse*, Paris : Gallimard, 1965, p. 611. Voir aussi la lettre précitée à François–Paul Alibert.

23) Lettre de Gide à l'éditeur Macmillan du 9 janvier 1914, reproduite par Michael Tilby, *art. cité*, p. 70.

24) ジッドは前出のアリベール宛書簡で「恥ずべき誤植だらけ」と記している（そして研究者の多くもこの記述をそのまま引く)。これはやや大げさな表現というべきか否か，実際に別添の正誤表が示す誤植は5カ所であった。

25) 同上アリベール宛書簡を参照。

26) Voir Gide – Rivière, *Correspondance 1909–1925*, op. cit., p. 420. なお同書簡集校訂者は普及版の刊出を1914年1月と注記するが，これは明らかな誤り。

27) Voir la lettre de Gide à Louis Fabulet (sans date, mais certainement) du 27 février 1914, reproduite dans le *Bulletin des Amis d'André Gide*, n° 105, janvier 1995, p. 182.

28) すでに名を引いたスタージ・ムーアですら，30年代になると次のように認めなければならなかった――「我々のだれもがタゴールの作品を知らない。というのも，ベンガル語を解し，かつ熟達した創造的英語力を身につけたほんの少数の者しか彼の作品を我々に示してみせることができないからだ……。〔過去の英語による〕翻訳は不十分なばかりか，誤解を与えるようなものであった。彼の小説や戯曲でさえ両国語の達人に翻訳される必要がある」(voir William Rothenstein, *Contemporaries. Portrait Drawings*, Londres : Faber & Faber, 1937, pp. 95–96)。

Lettre (inéd.) d'André Gide à Henry–D. Davray

5 Décembre 1913.

M. André GIDE
Villa Montmorency
PARIS.

Mon Cher Davray,

Voici la petite lettre préface que je mets en tête de ma traduction. Vous voyez qu'elle ne cherche pas à être méchante, mais simplement à remettre les choses au point ; la notice que vous avez peut–être vue déjà dans *La Nouvelle Revue Française*, en tête du choix de poèmes de Tagore, est plus inoffensive encore.

Mais je ne comprends rien à ce que vous me dites. Je croyais que la traduction était de Mademoiselle W[*ertheimer*] ; qui, peut–être, sait l'anglais mieux que vous encore et qui peut–être aussi le sait mieux que le français. Je ne vous reproche pas de ne pas savoir l'anglais : je reproche à cette traduction d'être bâclée, ce qui n'est pas la même chose. Je regrette que vous n'ayez pu apporter quelques retouches aux citations qu'en ont faites *Les Annales*, par exemple, et qui vont consacrer en quelque sorte un texte très défectueux. Vous me dites que vous n'y pouvez rien. Accordez–moi tout de même que vous en êtes un peu responsable – et ne vous rebiffez pas aux deux mots que je vous en dis.

Bien cordialement, votre

André Gide.

© Catherine Gide, 2006.

Lettre dactylographiée (le dernier mot «votre» et la signature sont manuscrits à l'encre noire), coll. particulière, 1 f. 215 × 165 mm tapé au recto verso (2 pp.), sans enveloppe conservée. Gide y joignit un feuillet double imprimé de la lettre–dédicace «À Saintléger Léger» de *L'Offrande lyrique* (Paris : Éd. de la Nouvelle Revue Française, 1913, pp. 7–9).